

氏 名	宮津 多美子
学 位 の 種 類	博士（ 文 学 ）
学 位 記 番 号	博 甲 第 8 9 0 6 号
学位授与年月日	平成 3 1 年 3 月 2 5 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	Bodies That Work: African American Women' s Corporeal Activism in Progressive America (機能する体：進歩主義時代のアメリカにおけるアフリカ系アメリカ人女性の身体的抗議)

主 査	筑波大学	教 授	Ph. D.	竹谷悦子
副 査	筑波大学	教 授	博士（文学）	中田元子
副 査	筑波大学	准教授	Ph. D.	馬籠清子
副 査	白百合女子大学 文学部英語英文学科	准教授	Ph. D.	マクナイト, アン

論 文 の 要 旨

本論文は、奴隷制度下で動産として扱われ搾取された黒人女性の身体の再定義が、進歩主義時代（1890～1920 年代）のアフリカ系アメリカ女性史のなかでおきていたことを解明するものである。アフリカ系アメリカの指導者ブッカー・T・ワシントンは、指と手のメタファーにより「アトランタ妥協」と呼ばれる進歩主義時代の国体（body politic）のヴィジョンを提示したが、人間の身体に喩えられたこの国家から、人種・ジェンダーの最下層に位置づけられたアフリカ系アメリカ人女性の身体は排除されていたという。

本論文は、進歩主義時代のアフリカ系アメリカ人女性たちが、歴史的に分断されてきた女性の身体――髪、声帯、子宮、裸体――の意味を戦略的に書き直し、そのことにより国家に参入していったプロセスをアーカイブ調査による一次資料から読み解く。これにより、従来のエリート知識人女性を中心とした研究では得られなかった新しい知見をアフリカ系アメリカ女性史研究にもたらす。

第 1 章（「アフリカ系アメリカ人女性の草の根ネットワーク」）では、洗濯婦から身を起こし、アフリカ系アメリカ女性のためのヘアケアで起業し会社を設立したマダム・C・J・ウォーカーを論じる。ウォーカーは、奴隷制時代の服従の象徴であった頭巾から女性の髪を解き放つことで自由、経済力、美、を手に入れることが可能であることを示した。著者は、起業家ウォーカーがつくったのはアフリカ系アメリカ人女性の成功のための新しい公式であり、2つの A―― Advertisement（広告）と Agent（エージェント）――がその中核にあったと主張する。ウォーカーの広告は、単に消費者を啓発するのみならず、顧客からの感謝の手紙を掲載するなどして、「創造の共同体」を構築する役割も担っていたと、著者は論じる。また「エージェント」はそれぞれの地域でウォーカー式美容術やビジネス哲学を実践し、これによりアフリカ系アメリカ女性たち

が社会的に覚醒するネットワークが生成されたという。ウォーカーは人種独自の美を対抗のナラティブとして描き、アフリカ系アメリカ人女性の身体を国体に接合しようとしたと、著者は主張する。

第2章（「黒人差別法に抗う声帯」）は、「声帯」によって人種的イメージを書き換えることを試みたエマ・アゼリア・ハックリーを扱う。現在では、ハックリーは中・上流階級の価値観を体現するマナーブックの著者としてもつばら記憶されているが、本章ではオペラ歌手・声楽家としてのハックリーの再評価を試みる。スピリチュアル（黒人霊歌）は、コミュニケーションを禁止された奴隷たちの暗号化された言語、感情表現であった。ハックリーは高度な知的技術である声楽をとおして、スピリチュアルを復活させ、合唱すること――つまり人々の声帯を震わせること――で共同体の団結および人種間の融合を促したと著者は主張する。アフリカ系アメリカ人の身体から生み出された美しい旋律は、やがて二〇世紀中庸から後半にかけてブラック・ミュージックの諸ジャンルとして開花し、アメリカ文化や政治において重要な役割を果たした。

第3章（「切り刻まれた子宮、拒絶された母性」）では彫刻家メタ・ワーリック・フラーによる「メアリー・ターナー」（白人の暴徒によって、子宮から取り出された胎児と共に殺害されたアフリカ系アメリカ人女性）像に注目し、フラーがいかに母体（子宮）への暴力という長い歴史をもった犯罪を断罪しているかを論じる。著者は、彫刻は、奴隷制における女性の子宮の法の物語――「子の地位は母親（子宮）に従う」（*partus sequitur ventrum*）――の書き換え、さらには黒人女性の生殖権（出産権、中絶権、養育権）への社会的介入への異議申し立てであると解釈する。二〇世紀初頭、母性礼賛の言説により、母性保護法の制定や児童局の創設等が実現したが、アメリカ連邦政府の母性保護の対象は白人女性だけであり、また優生学は人種や階級による母子の命の選別を正当化した。フラーは歴史的に言語化されてこなかった黒人女性の生殖権の問題系を、女性の身体像をとおして可視化していると著者は示唆する。「メアリー・ターナー」の彫刻は（その存在は知られていたが）長く公開展示されることはなかった。アフリカ系アメリカ女性の生殖権を扱ったこの彫刻は、さまざまな解釈を孕みながら、母体（子宮）への暴力という歴史的犯罪を断罪し、女性の身体の自律性を擁護するメッセージを発し続けていると著者は考える。

第4章（「未開と文明を演じ分ける」）は、舞踏家・歌手ジョセフィン・ベーカーの裸体を論じる。著者は、ベーカーが1920年代半ばにアメリカからフランスに渡り、アフリカ系アメリカ人女性の裸体が持つ意味を転覆させたと主張する。従来ベーカーの裸体は「人間性の表出」と解釈されてきたが、本章では「一つの舞台衣装」として再解釈する。裸体はしばしば奴隷的身分の象徴とされるが、フランスにおけるベーカーの裸体はアメリカの人種差別というスティグマの反転であると著者はいう。アメリカとフランスでは裸体の文化的意味が異なり、ベーカーは戦略的に裸体を纏うことで、アフリカ系アメリカ女性の身体が歴史的にもっていた否定的な表象を変容させていった。

結論では、21世紀初頭においても、アフリカ系アメリカ人女性による身体的部位の再定義は終わっていないことを指摘する。その一つの事例として、タイム誌の表紙に登場した、薄絹をまとった歌手ビヨンセをめぐる論争、とりわけ「あなたはまだ奴隷か――黒人女性身体の解放」と題されたパネル・ディスカッションにおいて、ビヨンセを反フェミニズムのテロリストと名指したベル・フックスの発言に注目する。

著者は、身体の見地から女性による作品や社会的活動を再検討することは、生産的な女性史の書き換えになると主張する。身体部位の意味や表象の変化は、女性と社会との関係性の改変につながる。なぜなら、身体部位は人として身体を構成し、その身体はさらに国家という国体（*body politic*）を生成するからである。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は、身体をめぐる歴史と文学・文化史とを交差させることにより、斬新なアフリカ系アメリカの女性史を生み出すことを試みる意欲的な研究である。とりわけ、アメリカ合衆国憲法に書き込まれた「五分の三条項」（黒人奴隷は一人の人間以下であり、5分の3人と数える）が示すような身体の分断化に対するアフリカ系アメリカ人女性たちの異議申し立てが、まさに身体そのものをとおして行われたことを解明するものである。著者は、入手困難な一次資料を、海外のアーカイブを広範に渉猟し、明晰かつ入念な分析を行い、論証を行っており、その力量は瞠目に値する。

本論文の時代的枠組みの設定もまたこの研究の価値を高めている。アメリカの進歩主義時代（1890～1920年代）は、人種差別、とりわけ南部ではリンチなどによる身体への暴力が支配する時代でもあり、アフリカ系アメリカ史の「どん底」時代とも重なる。まさにその時代にアフリカ系アメリカ人女性が、身体（ボディ）の部位の文化的再定義を行うことで、アメリカ国家（ボディ・ポリティック）への参入を押し進めたことを解明した本論文は、きわめて画期的な研究と言える。

1890～1920年代という30年間のみを論じた論文ではあるが、この研究成果が及ぼす波及効果は大きい。著者は、進歩主義時代のアフリカ系アメリカ人女性の文化的・文学的営為を、マサチューセッツ湾植民地総督ジョン・ウィンスロップの演説からアフリカ系アメリカ人指導者ブッカー・T・ワシントンの演説まで連綿と続く国家を身体に擬える、より広範なアメリカ文学史のなかに布置している。国家・身体をめぐる言説の決定的な転換点を明らかにした本論文の成果は、アメリカ文学史・文化史の研究全般にも影響を与えるだろう。

本論文に関して若干残された課題がないわけではない。文学作品（例えば、序章において引用されているウィリアム・ウェルズ・ブラウンの『クローテル---大統領の娘』における奴隷のオークションのシーン等）の解釈が不十分であること、本論文のなかではテキストの意味が作者の意図に回収されてしまう傾向があること等の問題点が委員から指摘された。しかしこれは本論文の先駆的で優れた価値そのものを減ずるものではない。本論文は海外の学術出版社からの刊行も決まっており、博士論文としては国際的にも通用する高いレベルの研究であると言える。

本論文を、課程博士学位論文にふさわしい内容であると判断する。

2 最終試験

平成31年1月14日、人文社会科学研究所学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。